

「神様が見てるのにね」

炬あかりが言うので俺おれも目でおう。なぜ無分別に塵芥ごみをすてられるだろう。ひろう人間の事を考えないのか、捨てられた場所の事を考えないのか、たんにすてる所までしか思考が働かないのだろう、パンを買う、食べる、すると袋が残る、自分が買ったのはパンであつて、袋ではない、だからすてる。詰つまり、こういう思考だろうか。ばかな。然しかし、ではないとしても、どうしてああ平然とごみをすてていく事ができるだろう、炬あかりが袋をひろつた。俺おれがうけ取る。クシャクシャと丸めてポケットにつめる。この駅にはごみ箱がない。何所どこかコンビニをみつけてすてる。電車に乗る。空缶あきかんがあるので炬あかりが拾つてもつ。

世界中の塵芥ごみを、ひろつて歩く事ができるだろうか。たとえばの話はなだ。町内中だつていい。俺おれはむりだと答こたえる。仮令たとえ自分の家の四囲まわりだつて、すてる人間がいなくなれば俺おれには拾いづける自信がない、根気もない、炬あかりは、炬あかりは屹度きつとわからないと答える。そのくせ、塵芥ごみがおちていけば、ひろうだろう。根気の一つく限り。炬あかりの根気がいつ尽きるのかはわかんない。或ある日俺おれと公園にはいって、其日そのは映画を視みようといつて上映時間までに間まが有つたから公園に行っただけだったのに、吸い殻が散乱しているのを見た炬あかりはひとつひとつ拾い始めた。最初は手伝たっていた俺おれも、最もうすぐ、映画はじまるぞと時計を見て焦あせりだした。炬あかりはうんと答こたえて、でも動く景色がない。緩漫ゆつくりたばこを掌てのひらに載せる。俺おれが渡した携帯灰皿はすでに溢あれていた。俺おれはほらと急いかしたりお前まへが視みたいつて言いつた映画だぞと促うめしたりしたが炬あかりは生返事はか許ばかりで手をとめない。すると手を休めている俺おれがわるいのかなとい

う気がしてきた。ひろうのを再開するが烟草はあちこちに散ばっていて嫌気がさす。自分が喫つてたものを捨てんなよ、喫煙者へ愚痴をたれる。俺れもたばこをすうが俺れは絶対にすてたりしない。しかし其んなものは社会に関係なく喫煙者は喫煙者で弾劾される。炬は誰もせめなかった。なにも言わずに烟草をひろって公園の一角にある灰皿へ捨てた。拾いおえたころ上映がはじまって十分程過ぎていた。俺れはあきらめてめしをくう場所でも探すかとたばこに火を点け様とした。其手を炬がとる。俺れの腕の時計で時間を確認するとちようどいい時間と笑らった。ちようどいいって、ご飯に？念のため確認すると映画にと笑う。そりゃあ予告とかあるけど、俺れが急かしても動じなかった癖に、いくつかの文句を言おうとするが早く早くとせかすので笑って仕舞った。烟草をしまつて映画館まで走つてもつと大きい携帯灰皿を買おうと思った。

俺れはむかし、塵芥をひろうのが、恥しかった。中学生や、高校生の時だ。偽善者としてみられるのではと思った、あるいは、実際に友人に言われたこともあったかも知れない。丈のあわない語を振り回してみたかった丈だろう、授業の一環で近所の清掃をやった時、まじめにとり組んだ俺れを「偽善者だ」と囃した友人がいた。明瞭した記憶でないので、あるいはもつと軽い言葉を記憶のなかで改変してしまった丈かもしれないが、俺れはそれから人前で塵芥をひろうのが恥ずかしくなった。ひろう時は人がいない事を確認した。同時に、夫でもだれかがみていて俺れの行ないをほめてくれないかと期待した。そんな期待をするのは恥ず可きことだと自分を戒めた。誤茶々と、考えるので、いつも拾いそびれた。いまは善と偽善の区別がわからない。

善と偽善はどう遣って見分ければいだろう。俺れを偽善者と囃した友人は、何を以て偽善者といっただろう。現代の中学生高校生など、情報にふりまわされ自分の言葉を只大事にする事ができないのだから、深く考えるにも当たらないだろうが、気になる。気にしているのか、しかし今はだいぶ薄れた、善と、偽善を、見わけける方

法<sup>なび</sup>採<sup>と</sup>ないといまは考える。やるかやらないかだ、目の前にゴミがある、ひろうか、拾<sup>ひろ</sup>わないか、其<sup>そ</sup>様<sup>ん</sup>なのはすべて自分次第だ、善<sup>ぜん</sup>も偽<sup>いつはり</sup>もない。判断<sup>はんぱん</sup>をするなら、夫<sup>それ</sup>は凡<sup>すべ</sup>て他人<sup>たにん</sup>に任<sup>まか</sup>せてしまつてかまわないだろう。

停<sup>と</sup>まった駅<sup>えき</sup>には構<sup>かま</sup>内にコンピニがあつて、そこにはゴミ箱<sup>あかり</sup>があつたので捨<sup>す</sup>てた。本当<sup>ほんとう</sup>は、是<sup>こ</sup>れだつて、いけ<sup>い</sup>ない事<sup>こと</sup>なんだろうね、炬<sup>あかり</sup>が前に言<sup>い</sup>つた事<sup>こと</sup>を思<sup>おも</sup>い出<sup>で</sup>す。人<sup>ひと</sup>にゴミ<sup>ごみ</sup>を押し<sup>おし</sup>つけてる。自分<sup>自分</sup>で処理<sup>しり</sup>できないゴミ<sup>ごみ</sup>を、お店<sup>みせ</sup>の人<sup>ひと</sup>に処理<sup>しり</sup>して貰<sup>もら</sup>つてる。俺<sup>おれ</sup>は言<sup>い</sup>われてから考<sup>かん</sup>えた、其<sup>そ</sup>んな事<sup>こと</sup>いつたら、俺<sup>おれ</sup>れたちが家<sup>いえ</sup>で捨<sup>す</sup>ててる塵<sup>ごみ</sup>芥<sup>がい</sup>も、いけ<sup>い</sup>ない事<sup>こと</sup>になる、炬<sup>あかり</sup>はさびしく笑<sup>わら</sup>つたそうだね、炬<sup>あかり</sup>はこうい<sup>い</sup>う話<sup>わ</sup>をするといつも淋<sup>さび</sup>しい顔<sup>かほ</sup>をする、そんな事<sup>こと</sup>考<sup>かん</sup>えてたら限<sup>きり</sup>度<sup>ど</sup>ないよ、俺<sup>おれ</sup>は励<sup>げん</sup>ますつもりでいつた、限<sup>きり</sup>度<sup>ど</sup>なんてないところ<sup>ところ</sup>で、いき<sup>い</sup>てるんじやないかつて、気<sup>き</sup>がする、……でも、なにもしてないわたし<sup>わたし</sup>が、言<sup>い</sup>える事<sup>こと</sup>じやないか、……炬<sup>あかり</sup>は塵<sup>ごみ</sup>芥<sup>がい</sup>をゴミ箱<sup>あかり</sup>にすてた。

「神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>は、なんて思<sup>おも</sup>うかな」

仕事<sup>しごと</sup>の休<sup>やす</sup>憩<sup>み</sup>中<sup>ちゆう</sup>には、炬<sup>あかり</sup>の事<sup>こと</sup>を考<sup>かん</sup>える事<sup>こと</sup>が多い、炬<sup>あかり</sup>はまだ大<sup>お</sup>学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>だから、たいていメール<sup>メール</sup>をすれば返<sup>かえ</sup>事<sup>こと</sup>が返<sup>かえ</sup>つて来る。俺<sup>おれ</sup>はたばこを吸<sup>す</sup>つてなんて旨<sup>おい</sup>しいん<sup>ん</sup>だろうと思<sup>おも</sup>う。おい<sup>おい</sup>しいと思<sup>おも</sup>える時<sup>とき</sup>もある。おい<sup>おい</sup>しくないと思<sup>おも</sup>う時<sup>とき</sup>もある。火<sup>ひ</sup>を消<sup>け</sup>して携<sup>た</sup>帯<sup>たい</sup>灰<sup>はい</sup>皿<sup>びん</sup>にしま<sup>ま</sup>う。携<sup>た</sup>帯<sup>たい</sup>灰<sup>はい</sup>皿<sup>びん</sup>にしては大<sup>お</sup>きいもの<sup>もの</sup>なので、ポケッ<sup>ポケッ</sup>トに入<sup>い</sup>れると嵩<sup>かさ</sup>張<sup>ば</sup>る。

休<sup>やす</sup>憩<sup>み</sup>はひとりです<sup>す</sup>ごす。配<sup>はい</sup>送<sup>そう</sup>のド<sup>ド</sup>ラ<sup>ラ</sup>イ<sup>イ</sup>バ<sup>バ</sup>ー<sup>ー</sup>な<sup>な</sup>ので、何<sup>なに</sup>もかもひと<sup>ひと</sup>り<sup>り</sup>で過<sup>す</sup>せる<sup>す</sup>だろうと思<sup>おも</sup>つて就<sup>しゆう</sup>職<sup>じやく</sup>した<sup>した</sup>ら、ち<sup>ち</sup>が<sup>が</sup>つた。午<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>の仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>は午<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>におわ<sup>わ</sup>らせて<sup>して</sup>事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>所<sup>じよ</sup>にもど<sup>ど</sup>つて<sup>して</sup>来<sup>き</sup>る。い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>ん休<sup>やす</sup>憩<sup>み</sup>して<sup>して</sup>から、午<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>の荷<sup>に</sup>物<sup>ぶつ</sup>を積<sup>つ</sup>込<sup>こ</sup>んで<sup>して</sup>配<sup>はい</sup>送<sup>そう</sup>を<sup>を</sup>する。配<sup>はい</sup>送<sup>そう</sup>先<sup>せん</sup>は個<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>の家<sup>いえ</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>たり<sup>り</sup>会<sup>かい</sup>社<sup>しゃ</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>たり色<sup>いろ</sup>々<sup>々</sup>だ。勤<sup>きん</sup>めは<sup>は</sup>じ<sup>じ</sup>め<sup>め</sup>た<sup>た</sup>とき、先<sup>せん</sup>輩<sup>ぱい</sup>から昼<sup>ひる</sup>飯<sup>はん</sup>お<sup>お</sup>前<sup>ぜん</sup>も一<sup>いっ</sup>所<sup>じよ</sup>に喰<sup>く</sup>う<sup>う</sup>かとお声<sup>こゑ</sup>が掛<sup>か</sup>か<sup>か</sup>つた<sup>た</sup>ので、鄭<sup>てい</sup>重<sup>じゆう</sup>に御<sup>お</sup>断<sup>とん</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>した。なん<sup>なん</sup>だ<sup>だ</sup>こ<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>と思<sup>おも</sup>われ、心<sup>こゝろ</sup>証<sup>じやう</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>した<sup>た</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>ない<sup>い</sup>が、仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>し、飲<sup>の</sup>み<sup>み</sup>会<sup>かい</sup>など<sup>など</sup>には<sup>は</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>様<sup>さま</sup>に<sup>に</sup>した<sup>ら</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>や<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>と思<sup>おも</sup>つて呉<sup>く</sup>れた<sup>た</sup>様<sup>さま</sup>だ。べ<sup>べ</sup>つ<sup>つ</sup>に<sup>に</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>話<sup>わ</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>のは<sup>は</sup>嫌<sup>きら</sup>い<sup>い</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>ない。た<sup>た</sup>だ、休<sup>やす</sup>憩<sup>み</sup>の<sup>の</sup>様<sup>さま</sup>に、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>

きまって顔を合わせて話しをしなればいけない時間があると思うと、気が滅入る丈だ。

休憩中は本をよむ。本はすきだ、でもたばこの方がもつと好きなので、喫いながら読んだりよむのを廃めて喫ったりする、喫っていると、考えごとができる、大層な事を考える必要はない、只、考える、夫が自然にできるから烟草の事がすきだ。

きょうは、一人、嫌な客がいた。通信販売でなにか買ったらしく、代金引換の荷物をもつて行ったら、「何でお前に金払わなきやいけねえんだ」と怒鳴られた。「ではこちらご購入されていないんですね」と確認を取ると「ちよつとまつてる」と言い二十分程またされたあげ句結局金を払った。

こういう客がいると、一日いやな気分がつづく。ほかの客には関係がないと気分を変えようとするが、うまくいかない。もともと愛想が宜い訳ではないので、曇りした気もちが伝わってはいないかと不安になる。伝わったら問題あんのかと捨鉢な気もちにもなる。もし、もし俺れにも信仰があればこんな気もちはいだかないだろうか、夫れでも、他に、優しくできるだろうか、神さまがいれば。でも俺れには信仰がない、嫌な人間は嫌な人間で、それを引き摺る自分も嫌な人間だ。俺れは人間の儘是を踰えたい、このいやなわるい気もちを、神様とは関係のないひとりの人間として。

然し逆に、あの客に信仰があったらあの男はあんなむやみに当り散したりしなかっただろうか。怒鳴れば俺れが憚って荷物をおいていくかもと考えたのか、単に癩癩が溜っていただけかは分らないが、もし信仰があれば、神が今此現場を瞰ているかもしれない、おれの事、悪く思うかもしれない、考えて、莞爾やかに対応してみせただろうか。ばかな。信仰をもっている人間がすべてみな穏やかだとはどうてい思えない。一般の人間よりも、自分の事、或はまわりの事を考える、顧る機会があるだろうか（例えば教典杯を読むことにより）割りあいとしては穏やかな人間が増える可能性はあるだろうが、飽まで割合は割合で、暴悪な宗教者だっているのでは

ないか、そこが人間の鳩（あつま）りであるかぎり。宗教が戦争を惹（ひ）きおこすなどわからない話しをしたい訳じゃない、ただいままで（まだ只（たつ）た二十年だが）生きて来た実感として、俺（お）れには左（そ）様な聖人が群（な）を為すような事態がしんじられない。群のなかに聖人が一人いるような事態ならまだしんじられる、しかしもし其（その）聖人がほかの俗人を薫（く）化（か）しようとした場合、俺（お）れは夫（それ）をたんなる自分の価値観の押（お）しつけじゃないかと思つてしまふ、疑（う）つてしまふ、外（ほか）の人間が俗に墜（お）ちてゐるから、わたしが彼らを引き揚（あ）げて上げよう？ 此（こ）んな傲慢な心持ちではないにしても、もし聖人に俗を見くだす、差（ち）違（が）いと認める気もちがあるとしたなら、俗人にも俗人の論理がある。高きを氣どつて、自己満足しているだけじゃないか、ほしいものをほしいと言わず、腹がたつても愠（い）りをかくす、それが人間らしいと言えるのか？ いや、俺（お）れは、何をいつてる。俗人に、聖人に、八つ当たりをしてゐるだけじゃないかみつともない。信仰以前の問題だ、あの客にさえ劣るのか俺（お）れは、そもそもあの客が劣つてゐるのかどうかさえ俺（お）れにはわからない。品性で、道徳で？ 人の、優劣は、なにで極（き）まるだろう。きまらないのか？ 優劣などはないのか、それさえ、断然ときめる勇気を俺（お）れはもたない。

炬（あかり）は分（わか）らないと答える。わからないことはわからないと。「知つてるふりしたつて、神さまには露（ば）れちゃうよ」炬（あかり）には何がみえてゐるんだろう、炬（あかり）の神様。炬（あかり）には宗教がないのに神さまがある。神さまをしんじる炬（あかり）を俺（お）れはしんじてゐる。俺（お）れが神さまを信じる事にはならない、「それでいいんじゃない？」炬（あかり）は全部（ぜんぶ）受け容（ゆる）れる。「できることを、やつていこうよ」俺（お）れにできることは、あの嫌な客を、わすれることだろうか、うらまないことだろうか、すなおに悪（にく）むことだろうか、悪（にく）むことが、わるいことだと俺（お）れは思わない。

炬（あかり）は能く待ち合（あ）はせに遅刻する。俺（お）れは時間に正確な方なので、いつも俺（お）れがまつ。炬（あかり）は平気な顔でやつてくる、「おまたせ」俺（お）

れは皮肉を言う。

「神様は遅刻を免してくれるのか」

炬はへへへと笑ってこたえない。こいつの神さまは都合が好い。炬はだらしない、時間にルーズだし、ものをたべる時はよく零すし、部屋も余りきれいでない。もし炬が実家をでたら、ちゃんと生活していけるのかと心配になることもある。でも俺れが整頓好きだから問題ないのかなとも思う。もしいっしょに暮らしたら、揉めるんだろうか。夫は夫で折合いを付けてやって行けるんだろうか。俺れはいま一人で暮しているから、一所に住まないかと言おうとしたこともある。然し炬がまだ学生なので廃めた。卒業して仕事に即いてからでも、遅くないだろう。歳は同じなのに、生活能力に差があるような気がした。学生と社会人では意識に差があると、ときどき同級生に逢うと思う。

きょうは映画を視に行った。つまらない、人をあいする映画だった。何て利己的な愛なんだろう、何て抽象的で、他人にむけている様で、自分にしか向いていない愛なんだろう、と思った。其んな批判を心でするといつも思う。じゃあ本当の愛ってなんだろう、無償の愛のことか、もし俺れが理想とする愛をたとえば俺れが絵描き切ったとして、この映画をつくった人、この映画に感動した人達は、なんて嘘っぽい愛なんだろう、なんて美しくくない愛なんだろう、思うんじゃないだろうか。批判なんて意味ない、お互いの価値観を推しつけあってる丈だ、論破すれば勝ちの不粹なゲームだ、隣りで炬は感動してないでいた。スンスン鼻を吸る音がする。俺れと炬は趣味があわない。映画に行く時は交互に候補をだして行く。たいてい俺れが面白い時は炬が退屈な顔をし、俺れが詰らない時は炬が顔を輝かせている。だったらちがう映画を見ればいいのに。なんでだろう、だから、炬も俺れもおもしろいと思える映画に逢えると、すぐくうれしい。

きょうのは詰らなかつた。炬が遅刻して来たこともあって、俺れはムスツとしていた。最初炬はあのシーンが宜かつたねえと話

し懸けて来たが、俺れの表情をみると口を噤んだ。俺れはこういう時なにも喋舌らない。もともと、おしゃべりでないし、話さなくてもかまわないと思っていた。つたえるべきことをきちんとつたえられたら、夫で充分だろう。電車がゆれる。座席はあいていたが俺れと炬は立っていた。炬は極力席に座わらなかつた。「私は、座らなくても大丈夫だけど、必要としている人がいるでしょ、夫はべつに年齢のこと丈じやないと思う。お年寄りや妊婦さんみたいに、あたり前に譲って上げましょうってなってる人丈じやなくって、若いサラリーマンの人でも、仕事で足を棒にして歩き回ってへトへトかもしれない。私にわかるのは、私はすわらなくても大丈夫ってこと丈だから、私が席をふさぐことはしたくないんだ、こんなふうに、いちいち自分に言い訳しなきゃ席をゆずれないってだけなんだけどね」炬がすこし笑って言ったことを思い出した。俺れは最初、なんとなく、そういうのを自分に課してるんだろうと思っただけでふうんといっていたが、又別の日に炬の頑なさを見て驚ろいた。炬は熱を押して俺れと遊びにきていた。たしか付き合って一年の記念日だったと思う。逢った始めは体調がわるいのにな気がつかなくて、でもご飯を喰べてる時に分った。炬、顔色悪いぞ、言った俺れに無理して笑った、そうかな、ちょっと疲れてるのかもね、ご飯もろくにたべないので額に手在中てた。熱いぞ、俺れはあわてて精算して帰りの電車に乗った。炬は何度か「ごめんね」といった。さいわい電車はそこまで混んでいなくて席が空いていた。ほら、座ろう。促がした俺れに炬はなぜか抵抗した。俺れに獅噛みついてはなれない。炬が言ったことを思い出した、こんな時ぐらい座ったって宜いんだよ、今、席を必要としてるのはお前だろう。炬は激しく首を振った。代りに足もとを指さす、ごみが、おちてる…俺れの靴には空き缶がころがってきていた。俺れは苛烈した。お前は何になりたいんだ、其んなことしたって、熱がさがる訳じゃない、自分の身軀があぶない時にまで他のこと考えることはないんだよ。炬は上気した、苦しそうに潤んだ瞳で俺れをみた。私は、

「私は言い訳ばかりだけど、神様にだけは、言い訳したくない、……」

炬あかりと俺おれの降りる駅は次の駅だったから俺おれは炬あかりを抱だき締しめて待った。降りる間に缶をひろって握り締めた。スチールの缶は硬かたくて変形もしなかった。炬あかりをご両親に引き渡したときも炬あかりは「ごめんね」と言った。俺おれは公園で缶をなげ棄すてようとしたができなかった。コンビニのごみ箱に力任せにつっ込んだ。俺おれは、炬あかりの、なにに怒ってるんだろう、……いま不機嫌になっている理由がわからなくなった。気分をかえて詫あやまろうと思った。その時炬あかりが「ごめんね」と言ったので俺おれもごめんといった。仲なおりにして、ふたりで夜をすごした。

結婚のことを考えたのはいつ位ぐらいからだっただろう。少すくくとも昔、中学生や高校生のころは三十をすぎてからかな、と漠然と考えていた。当時は女の子とつきあったことさえなかったのに皮算用だけは立派だったから可笑おかしい。高校を卒業していまの配送の仕事に就職して、家を出てから考えが変わかわった。少し宛ずつだが。

炬あかりとつき合いはじめたのも原因としては大きいかもしれない。炬あかりとは高校が一所いっしょで、高校三年のときにはクラスも同じになった。が話したことは殆ほとんどなかった。ない儘まま卒業した。夫それから半年後に同窓会と称して飲み会をやったときにまた炬あかりにあった。奇麗きれいになったな、というのが正直な印象だった。

其そ所で連絡先を交換して連絡する様になって、つき合ってからもう二年以上がたつ。ひとり暮ぐらしはあとすこしで三年をかぞえる訳で、俺おれはこいつと結婚するんだろうな、と思う様になった。喧嘩けんかもしていやな気もちになることも有るが、大抵そこまで長引ながびずに仲直りをするし、詫あやまるのもどちらからともなくという感じだから、バランスがいいのだと思う。炬あかりには鍵もわたしてあるからしよつちゅうくる。とは言っても、大学三年生の炬あかりはすこし前から就職活動をはじめているので、以前程ではなくなったが。



だから、こういう時こそ、いっしょに住んだら便利だろうなあと  
思う。

きょうは炬あかりがくる日だ。序ついででなので、掃除でもするかと思立  
つ。俺おれは細心まじめな方だとは思おうが掃除機はここ一カ月ぐらいかけて  
なかった。こういう時、炬あかりのだらしなさを指摘さしして置いて、自分  
はどうなのかと思う。ほかの人は何どうしているのだろう。俺おれの友  
人は半年は優ゆうに掃除機をかけないやつもいる。掃除機も持っていな  
いやつがいます。すると、俺おれが細心まじめなのでなく、俺おれの四まわり囲わりが凶ず法ぽろ  
螺らなのかもしれない。

炬あかりがきた。何なにだか、元気がないので、どうかしたかと訊きくがな  
んでもないと答える。掃除が途中なので、ちよつと座まつてて呉くれと  
言いってコーヒーを淹ひれる。うちには椅子がないので、低い食卓のま  
えで床に座まつてもららう。掃除はあと台所をのこす許ばかりだ。此家このは古  
く駅から遠いので安やすくて広い。俺おれは仕事がら柄車がらで移動することが  
多いので駅から遠いのは問題がないにしても、広いと掃除が面倒だ  
といえは面倒だ、べつべつの一人暮らしひとり暮らしをしている奴やつにはぜいたくだと  
いわれるが。

「話はなしがあるの」掃除を終え掛かけた俺おれに炬あかりが言う。俺おれは手  
をとめ食卓むかに向むかう。其前そのに自分のぶんのコーヒーを入いれた。炬あかりは  
手を付けていない。炬あかりはカラリと鍵かぎをおおいた。「別わかれて欲しい」  
消え入りきそうな声こゑで言う。

心臓こゝろの音が聞きえた。いわれた意味こゝろが理解こゝろ出来ない。「どういいうこ  
と」言いうが炬あかりはこたえない。俯うつむ向むいて下の、食卓むかより更に下の自  
分の手のあたりを見ている。正座せいざしている。きょうはジーパンを穿は  
いていて、コートも脇わきに置いていて、そとが寒いからだろうと思っ  
ていた。俺おれはまったまったがまち切れなくなった。何どういいうこと  
だよ黙もくってんな言いつてる途中ちゆうちゆうで炬あかりが遮さへぎった。

「好きな人ができたの」

俺おれは又また黙もくった。黙もくって息いきがくるしくなった。黙もくれば黙もくる程い瞋いか  
りが堆積たいせきしていく様ようだったが、発はすべき言葉ことばが分わからなかつた。一方い方で、

何をいっても瞋りは出ては行かないだろうと言う事を考える自分もいた。単純にいえば俺れは戸惑った。炬は震えていた。肩をふるわして音もなく泣いていた。音がないのだから俺れにとどいていない丈かを俺れはあやしんだ。なぜお前がないかと思つた。瞋りはまたたやすく湧いた。瞋りが生れてしかしどこにもだせずつめ込んでいるうちに少しの時間がたった。

「どんな、どんなやつだ」俺れがきいた。瞋りが頭にも渦まいて、どうしたらいいのか、判断が出来なかつた。時間を稼ぎたかつた、言いたい事を整理する時間を、然し夫は何分あるいは何時間あればたりるのだろうか、寧ろ怒鳴りつけてやればすむだろうか、なにもかも解決するだろうか、俺れは何を考えているのだろうかと思つた。解決したいのか、瞋りをすこしでも減すべきなのか、炬の不義を責めべきなのかと考えた。炬の不義。この言葉が通りすぎると俺れの瞋りはより燻えた。俺れを燻いてくるしめた。炬の頬を張って、いや、殴り付けて、蹴り飛ばしてやれば、何うにか、何にかなるだろうか。どうにもならずにすむだろうか、腹を殴って、顔面を蹴って、やれば、どうなるだろうか、どうにもならないだろうか、炬が喋舌つた。

「あかるくて、面白くて、やさしい人」

俺れはテーブルを殴ってたつた。炬がびくりとしたのがみえた様な気がしたが、夫は俺れの虚栄心の為めかもしれない。俺れは自分の家をでた。誰とも会う気になれず、家から距離のある駐車場で車にのり、発車もさせずにいて中から車体を蹴った。拳が痛むので矢張りどうにもならなかつた事を知り、瞋りは拳をとり巻いて不純なものに変わっていくのを知つた。不純な瞋りは更に不快で、夫は胸の中の瞋りと融合して又瞋りになった。

何所かへドライブして旨まくもないめしを喰って帰って来たのは深夜だった。家には鍵が掛つていた。中にはいると、郵便受もないドアポストの下に、裸の儘のキーホルダーもなにも着いてない鍵がころがっていた。ごめんなさい位書けよとドアをなぐつた俺れは、

謝罪の手紙を心のなかで期待していた。

夜が来る、ねむれない夜、瞋り<sup>いか</sup>で、憎み<sup>にく</sup>で、膝を突き、肘をつき、枕と鼻を突き合わせる。枕を覆った布、青色の、炬<sup>あかり</sup>がえらんどももの、炬<sup>あかり</sup>！ 剥ぎ取って、タオルを宛てたのは、何日前だ？ 忘れてないわすれたふりをしている三日前だ、あの、別れを、つげられた日だ忘れもしない！ すきな人、すきな人、すきな人、自分の行<sup>おこ</sup>ないを、神様がみてるんじや、なかったのか、好きな人作っちゃいけないってのか！ すきな人できた場合、どうするのが最善の選択か、あの女が仕<sup>し</sup>た、アクション起<sup>おこ</sup>すまえに別れんのが最善じゃねえのかだけど！ 其<sup>そ</sup>んな素振<sup>そぶ</sup>りいっさいみせてなかった、俺<sup>お</sup>れが気付かなかった丈<sup>だけ</sup>か、そう言<sup>い</sup>やこん所<sup>ところ</sup>うちにはあまり来てなかったあれは就活のためだろう、まさか、まさか、まさか、まさか、確かめたい、あうのか、あいたいのかあのくそみてえな女と、違う確認したいだけだ、はっ、くそみてえな女ずいぶんな言草<sup>いぐさ</sup>だな前傾<sup>のめ</sup>り込んでた癖に、信頼<sup>しん</sup>、してた癖に、あんな女、みた事なかった、神さまとかいって、なにもかもものり躰<sup>こ</sup>えようとして、夫<sup>それ</sup>で俺<sup>お</sup>れも裏切ったのか！ 裏切っただなんて大げさという、被害者気どりか左様<sup>そよう</sup>だよ被害者じゃねえか被害者じゃないのか？ ああ、吐き気がする、でも実際には吐けない俺<sup>お</sup>れの傷なんて左様<sup>せん</sup>なものか吐けりゃあそれが大層な傷かよ！

俺<sup>お</sup>れは携帯を開いた。この三日間で何十回と、メールがとどいていないか確認した、何十回確認しようとメールは来ていなかったそうかよ！ 詫<sup>あや</sup>まるようなことは、なにもないってか詫<sup>あや</sup>まるメールが来たら、俺<sup>お</sup>れはどうするんだろう…罵倒<sup>おのの</sup>することを夢に見た、相手からの文面をいく通りも妄想して、それら凡<sup>すべ</sup>てに罵倒<sup>おのの</sup>と、考えられる限りの憎しみを載せて返した免<sup>ゆる</sup>したいのだろうか、免<sup>ゆる</sup>して、また、二人で遣<sup>や</sup>り直したいのだろうか、現実にはメールも電話もきていない。

仕事をする、荷物をつみこむ、運ぶ、卸す、運ぶ、卸す、事務所へかえる、飯をくう、寝れる日はすこし寝る、荷物を積込む、運ぶ卸して運ぶ、仕事をしていると楽だな、思い、同時に平常どおり仕事ができるのが忌ま忌ましくなり、朝起きるのもめんどろだが仕事なので起きる、そして、携帯を、確認する。

此方から、メールを送ろうかと、何度も思った、電話をしても、出て貰えなければ、仕様がな。夫に感情的になつてしまうのではと思つて、こわい、なぜ感情的になつてはいけないのか、会話にならないから？ 感情の話した、感情と、実生活の話なのに、感情的になつちや不可ないなんて、左んなものか。だから、メールを送ろうかと思つたが、送る可き語なんてあるのか。

何うして俺れではだめだったのか、俺れの、どこが、駄目だったのか、教えて呉れてもいいだろうと思つた、女々しいな、女々しくて浅間しい、何所かが、駄目だから、去つて行つたのだろう、そんなの明瞭言葉に出来る訳ない。あるいは、どこもだめじゃない、ただ、あの人がよかつたなどと躲避かされる、只の責任のがれで！ 又、怒りが、もえて来る、仕事が終ると考え、勝手に相手の発言を拵らえて、ひとりで瞋りを滾らせる、ぶつとぼしてやりたい、つきあつてる時は、一度も、手を上げたことなんてなかつた、大切にしていた、大切にしていたんだ！

だからつて相手が自分を大切と思ふ訳じゃない。

そとでたばこをすつていた丈で、気づいたら三十分経つていた。二本しか喫つていないのに、気が付けば手が寒い、帰ろうと一度事務所に戻ると事務の宇川さんから「今日飲みいかない」と誘われたので一も二もなく賛成した。

宇川さんは職場の数少ない女性で、若い女性は宇川さん丈だ、とは言つても二十八だから俺れよりも七つ歳上ということになる、歳の話しをすると怒こられるが。宇川さんとは会社の飲み会で席が近くなつた時気が合つたので時々、数か月に一回程度だが、のむ様になつた。

炬<sup>あかり</sup>は宇川さんの事をしっていて一所<sup>いっしょ</sup>にのんだこともある、炬<sup>あかり</sup>か、考えるくせが抜けない、携帯の番号も知らないから浮気だと思わないでね、と宇川さんは炬<sup>あかり</sup>に笑<sup>わ</sup>らっていた、「炬<sup>あかり</sup>ちゃんとはどう」酒<sup>いさなり</sup>がくる前に唐突<sup>いさなり</sup>話しをふられる。

「別れました」

「えっ別れたの」

「はい」

「何でまた」

「好きな男ができたとかで」

「じゃあ失恋<sup>ふ</sup>れたのか」

「そんな露骨<sup>あ</sup>にいわないでください」

「いつよ」

「一週間……も前じゃないです」

「ああ……そうだったの」

宇川さんは烟草<sup>たばこ</sup>をすって烟<sup>けむ</sup>りを吐いた。俺<sup>お</sup>れも烟草<sup>たばこ</sup>に火<sup>つ</sup>を点ける。炬<sup>あかり</sup>に関する事を、口<sup>くち</sup>からだしたくもなかったが、一人で鬱々<sup>めし</sup>と餐<sup>めし</sup>を喰<sup>た</sup>べるよりはずっとましだった。食欲は別<sup>べつ</sup>におちていなかった、其事<sup>その</sup>でまた忿<sup>むか</sup>付いた。しかし、落ちたら落ちたで、きつとむかついただろう。

「何、一回で話<sup>わ</sup>しついたの」

「ん、まあ……左<sup>そ</sup>うですねうちの家で」

「どこの男で、どんな経緯<sup>けいゐ</sup>で、いつ頃からそうなったって？」

「なんか、明るくて、おもしろい男<sup>おとこ</sup>だそうですね」

「いやいやどんな男<sup>おとこ</sup>かはしらんよ」

「あと優しいとかもぬかしてました」

「まあ最初<sup>はじめ</sup>はたいていどこの男<sup>おとこ</sup>もやさしいよねえ……んーいや、そうじゃなくて、なに、問<sup>た</sup>質<sup>だ</sup>してないの？」

「まあ、……そうですね」

「炬<sup>あかり</sup>ちゃんから切り<sup>き</sup>りでしたの、あんたが問<sup>た</sup>いつめたの」

「炬<sup>あかり</sup>から、別<sup>わ</sup>れてほしいって言<sup>い</sup>われました」

「そんではいいいいって別れて来た訳？」

「はいはい言ったわけじゃないですか、ただ……まあ、なんかいったっけな」

「何も言っていないと」

「うん？ まあ……左うですね」

「そうですか……」

宇川さんは又けむりを吹いた。俺はたばこを揉み消す。料理がきたのでたべた。甘いと思った。宇川さんは烟草を喫い、飲む。暫らくだまって喰べた。話を転じた方がいいかな、気まずいかな、思っていたらまた宇川さんがしゃべった。

「お節介かも知れないけどさ、あんた、忿ついでないの？ その儘でいいのとつぜん来て話しして帰えっちゃった訳でしょ」「あつ家をでていったのは俺れです」「あつそうなの。でもさあ、突然そんな一方的に別れ話されて、むかつくでしょ、くやしいでしょ、あたしだったら、男引叩くだろうし、実際したことあるし、そうでないにしても、自分の思う通りにやってみた方がスッキリするんじゃない、夫れともおわってみれば其んなにすきでもなかったの」

俺は口にしていた料理を嘔み下しながら考えた、好きでなかった訳はない、好きだった、初めて好きになった女だった、今でも、好きなのかと言われれば、好き、なんだと、思う、だからゆるせない。憎くしみがとまらない。俺は啣えていた箸を置いた。

「其の、話しを、された時血がへんな風に廻ったっていうか、ふざけんな、ふざけんなって何度も思って、なんか、言って遣ろうと思っただけです。汚ない話ですけど、なんか俺は其話された一瞬に、こいつにダメージをのこしてやりたいと思って、どうしたら宜いだろうとか考えて、凄、瞋りばかり湧いて、何うしたら宜いのか全然分かんなくて、でも、此所でなにかゴチャゴチャ言うより、なんにもいわずに去った方が損傷がのこるんじゃないかと思っ、でも只去れなかったから机だけわざと大きい音出るように叩いて（多

分わざとです）家を、出て来ました。でも、俺おれがそうした方がダメージが残ると思っただのは、良識のある人間、俺おれが、しつてる、炬あかりであって、あの日の炬あかりが知らない人間、だとは、いわないんですが、もしかしたら炬あかりは全然俺おれがしんじてた、通りの人間じゃなくて全部幻想だったかもしれない、俺おれは炬あかりのとなりにはずなのにずっと見てた筈はずなのに、とか、ぐるぐる考えて、やっぱりなんか言っつてやれば宜よかった、いまからでも、いつて遣やろうかなんて、でも、俺おれがしんじてた、炬あかりまで疑うたがいたくなくて、夫それは自分のためでも夫それはわかってるんですけど、それは、やっぱり、悔ほしいです。でも、他の理由ほかならともかく、好きな男が出来たって理由だったら、もうとり戻もせないだろうし、もしとり戻もせても、それは今までの関係と同じじゃなくなって、俺おれはいままで通り炬あかりのこと信じることは出来ないし、疑うたがった儘ままじゃないですか、炬あかりがだれかに優しくしても、俺おれになにか言っつてくれても、絶対疑うたいはとれない。だから、引き止めなかったし、なにも訊きかなかったんです、まあ全部その瞬間に考えた訳わけではないですけど」

あ、なんか、ごめんなさいと言うと宇川さんは「ううん」といった。又またたばこを喫すって店員に灰皿を替かえてもらう。此人この人は、同情も、気休きめもいわない。だから、自分が同情や気休きめを期待してたんだという事に気づける。宇川さんは「そっか……」といった。

「まあ、あたしの友達で、好きな人できたって言ったときの相手の反応で、自分への本気度を確認する子もいるけどねー」

「……夫それで、相手がなにもいわずに去さったらどうするんですか」「相手にもよるみたいだけど、ごめん遣やり直なそうって自分からい出すみたいだねー結局自分の本気度を確認してんじゃんって皆みんなで笑わったけど」

宇川さんが笑うので俺おれも笑った。

「まあ、そういう遣やりかたをする人にはこっちからお断ことわり願ねがいますよね」

宇川さんは笑って煙草たばこをもみ消けした。

「正直に言ってみて呉れて、有難ね。まあ、夫れでも蟠まりがあるなら、逢ってみるのも好いと思うよ。自棄飲だったら御姉さんがつきあって上げるから、いつでも誘いなさい」

自分が、不幸だと、思っていた。それよりも不幸な人はいくらでもいるとわかつてはいたが、夫れは知識の上だけで、感覚としてしんじることはできなかった。店内が賑ぎわう。このなかの何人が幸せで、何人が空笑いで、何人が泣いているんだろうと思つた。

かえると、話しが出来て、よかつたなと思えた。整理ができた。憎しみは憎しみの儘で、薄らいだ気もしないが、気分は変わった。とに角めしをひとりできいたくなかつたから行つただけだったが、いつて好かつた。宇川さんのお蔭だろう、いつもよりは、晴やかな気もちで、布団の中に潜つた。

眠る前に、炬の友達の深山さんという子と三人で呑んだときのことを思い出した。炬を送つてから、暫く、深山さんとふたりでかえていた。「あの子のこと、大切に上げてね」深山さんは道中ふいに言つた。

「ああ、うん、……夫は、もちろん」

「あの子、平常じゃ、ないでしょ。変つてゐるっていえばそれまでだけど、それ以上だよ。宜い子なんだけどさ、……凄ごくい子なんだけど」

「ああ……うん」俺れはわずかに頷ぎいた。

「なにかに縛ばられてるって言うかさ、あれじゃ、幸せになれないと思うんだよね、心の底からはさ、だから、たいせつにして上げて欲しいの」

深山さんが語つたことは、俺れにははじめの話しだった。ふたりが出逢つたアルバイトで、炬がそこを退める切掛けになつた話しだった。炬と深山さんは、ある御菓子屋でアルバイトをしていて、年が一緒だったこともあり仲よくなった。当時二人は高校生だったが、そこは高校生だけでなく、主婦の人や大学生など幅広い年



齢の人が働らく職場だった。炬は、まあ、うまくやっていた様  
みえたという。或日パートのおばちゃんが騒ぎ出した。

「わたしの財布がみつからない！」

更衣室のかばんのなかに置いていた所、失くなったと言う。開店  
前に朝礼をしている時で、店長が撫だめた。ほんとうに、ちゃんと  
鞆探してみた？ 信じてもらえないおばちゃんは激高した。貴方  
でしょ！ 炬を指びさす。貴方、着がえるの、いつもおそいじや  
ない、私のあとに更衣室はいつたのあんた位よ！

炬は驚ろいて目を丸くした。そのおばちゃんは、なにかと言う  
と騒ぎだし、すぐ四圍の不当さを主張するので、疎ましく思う人も  
おおかつたという。深山さんはまた始まったと傍観していた。炬  
が否定して、店長が仲裁して、おわりだろう。抑も本当に財布が  
なくなっているのか、鞆の奥からでて来るんじゃないのか、思っ  
ていた。

然し炬は否定しなかった。否定も肯定もせず、睨と目を俯せて  
いた。店長が優しく声を掛けた。違ってたら違うっていった方がい  
いよ。しかし炬は動かなかった。おばちゃんは凶にのつた。やっ  
ぱり！ 病しいことがあるからだまってるんでしよう、一寸、この  
子のかばん調べてよ！

深山さんが抗弁して、炬に遣ってないって判然言ってやんなよ、  
声をかけても炬は黙っていた。まさか、深山さんは思った、店長  
もあせりだした。おばちゃんはますます騒ぎ、ほら、はやく調べな  
さいよ、警察呼んでも宜いのよ、店長も警察沙汰は嫌でしょう、開  
店の時間が迫っていた。

結局ほかの人には仕事にかかって貰い、店長と、社員が一人、炬  
とおばちゃんまで更衣室に向い、関することになった。深山さんは私  
も入れて呉れと主張したが、店を開けない訳にはいかないと押留め  
られたという。まさか、炬が、其んな筈はない、まだ一年とすこ  
しのつき合いだ、そんなことをしない子だ、ことぐらいわかる、  
ほんとうに分かってる？ いや、信じてあげなきゃ、でも、だったら、

否定すれば宜いだけの話でしょう、否定しないってことは、まさか、「人を信じるって、口にするのは簡単だけど、じっさいああいいう場面に逢った時、信じつづけるのはすごく難かしいなって、その時思った」

深山さんが言うので、俺は頷いた。

結局炬の鞆からはなにもでて来なかった。念のためとおばちゃんのかばんも検められたが、睨に財布は見つからなかったという。おばちゃんはすみずみまで執拗に調べたあと、現金だけ抽きとって、窓から捨てたんじゃないの、猶も喰い下がったが炬の財布にはたいた金ははいっていなく、店長が其後更衣室周辺を漁ってみても財布は出て来なかったの、おばちゃんの財布は何ものかに盗られたということしかわからなかった。おばちゃんは不服だったが、警察だけはと店長に懇願され、それ切り何等の発展もなかった。

だからおばちゃんの疑がいは晴れない儘、他のパート連と結託して炬を窘りに懸り、ほどなく炬は其所を退めた。後日、「違うなら違うって言やいいんだよ」と店長が憤おつたのを、深山さんはきいてなにも言えなかった。

「退める時、あたしには声を懸けてくれたのね、わたし、やめるのってさびしそうな顔して言ってた。貴方が間違っていないなら、やめることないじゃない、ねえ、どうして一言私じゃないって、いかなかったの、炬はやってないんでしょって私なんか悔やしくて、怒っちゃった。そしたら、炬言ってた」

私が信じて貰えないのは、それまで私がしてきたことの積み重ねだから、しょうがないよ。努力がたりなかったんだと思う。夫に、私がやってないこと、絶対に疑がわなくて知っていてくれる人がいる。あそこで私じゃないっていても、ほかのだれかが疑われて、そしたら一所でしょ。だったら私でいいかなって思ったの。

「私能く分なかつた。だって、一步まちがえば警察沙汰になつて、冤罪でも何でも捕まっちゃう可能性もある訳でしょ、あんな口うるさいおばさんにも責められて、夫に、自分の疑がいを晴すこと

でほんとに拗とったやつがつかまるかもしれないじゃない、言ったけどそうだね、私、まちがったことしてる淋しみしそうに笑って、なにもしわないの。私怒おこってその場をとび出しちゃったけど、今でも、炬あかりと会あってる。今でも炬あかりのこと正しいなんて思おもえないけど、……」

俺おれも正しいとは思おもえない、でも、炬あかりが言った「知しってるって呉くれる人」っていうのは、吃きつ度神様のことなんだろう、思った。炬あかりは、以前ひどく誤解を受け、挪から揄かわれたことがあるので、それから神さま云々うんぬんは極力人に言いわないのだという。俺おれは此このとき其話そのしを聞いた許ばかりで、本当に神様がいると思おもっているのだろうか、疑うたがっていた。でも疑うたが度たくはなくて、この話をきいたとき、鳴あ、ほんとなのかなと思おもって安心した様な信じ切れない様な複雑な気分にななったことをおぼえている。

思おもいだしたら少し笑わえた。あいつはあいつなりに神様にそむかないように、誠実に俺おれと別わかれたんじゃないか、思おもって、左ひだり右みぎしたら、メールが来て夫それは真摯まじに詫あやまるような文面で、俺おれが寛大に許ゆるすような妄想をしたからで、俺おれはばかだなと笑わった。ほんとうに左ひだり様さんなメールが来たら、何なにうするんだろう、……俺おれの妄想は墓ぼ蝦かみたいで、だから、鳴あらない儘ままの携帯電話を意識しながら、俺おれは眠ねった。

炬あかりがいったことを思い出した。別に、そんなに躍起えつしにななって、塵芥ごみ拾ひろうことないんじゃない、俺おれが訊きいた時ときだった。

「やつきにななってる様に、みえるかな」

「や、夫それは、……言葉の文彩あやって言うか、……躍起えつし、ではないけど、ちゃんとひろって偉偉いなああって思おもったっていうか……」

炬あかりは笑わった。「其そのんなにフオーローフォーローしなくて好いいよ。たしかに、……むきにななってるのかもね……」炬あかりは暫しばらく考え込んだ、「ねえ、こんなこといっても、信しんじてくれないかもしれないけど……」炬あかりは俺おれを見た。「神さまあかりって信しんじる？」

「神様か……考えたこともないな。ってことは信しんじたことことはない

んだろうな。実家はべつに宗教にはいつてるわけでもないし、神様の恩恵を蒙ったおぼえもないしな……何、炬んちはなんか宗教に入ってるの」

炬はさびしそうに笑った。「宗教か、……うちは全くの無宗教だよ、お父さんも、お母さんも、平常の人。でもねえ、わたしは神さまのことしんじてるんだ、……私や、世界のこと、上からじつとみてるの」

春のおわりか、夏の始めか、気持のいい日だった。俺たちは海のみえる公園で、ベンチにすわっていた。俺は神様について考えたことがなかったから、返事をし兼ねた。「見られてるんじゃないやあ、へたなことは出来ないな」鳥が飛んで鳴いていた。

「そうだよね、下手なことはできない、だから、私は、ごみをひろうの。ごみを見逃したり、言い訳をしたり、全部神さまにみられるから、胡魔化したくないんだ。緊張してるのかも知れない、……夫でも、できることを、やれたらなつて」

「そうか……」俺は、何んなことを、考えていただろう、どんな気もちで、炬に接していただろう、いまは曖昧にしか思い出せない。「天国にいきたいとかでは、ないんだ」

「私の神様はね、私がかつてに造っちゃったから、ぼつを与えたりとかはないんだ。ほめてくれたりもしない、ただ覽てるの。天国も地獄もないし、前世も来世もなくって、なにもしないんだ。具體的に考えたことないから人間のかたちもしてなくて雲みたいなのに目とか鼻が付いてる程度」炬は笑った「ねえ、此んな話しを、中学のときに仲の宜い子にしたらね、笑われて言い触らされちゃった。お前新興宗教に這入ってんだろって、男子には指されるし、だから、あんまりばかにしないでね」

「仕ないよ」俺は左うだたばこをすっていた。「炬のこと好きだからね」

炬は晴れやかに笑らった。俺は炬の笑顔が好きだった、淋しく笑うのは嫌いだった、其様な顔すんなよ。俺が、傍ばにいて、

神様のことごまかさないうで済む様に、手伝って遣るから。そうだ、そばにいること、ねがってた、……

黒池と逢うのは、数カ月ぶりだった。黒池は中学のときのもだちで、今も時々飲みに行く。黒池は大学生だった。黒池は就職活動のことを嘆じた。

「就活まじで面倒臭え。でも、ここで頑張んねえと将来不安だしさあ、ああ学生生活もあと一年かあー」

「お前ねえ、もう三年もまえに学生生活おわってる奴の前で、そんな贅沢言うんじゃないよ」

黒池は突っ伏していた顔をあげた。「でもお前すげえよなあ、高校卒業してすぐ就職だろ、己れすぐやめると思ってたもん正直。大学か、専門学校いきやあよかったのに」

「別に」俺れはひと口酒をのんだ、「働く方が楽だよ。仕事にも因るけど、学校忙がしくてバイトしてるやつより時間有るし、金も自由に遣えるし、嫌なこともあるけどそんなん何様なことでもいっしよじゃん、ちゃんと働らけばそのぶん自分に返って来るから俺れは気に入ってる」

卒業に際して進路を選べと迫まれた時、俺れは就職を選んだ。うちの学校にはほとんど就職を希望する生徒はいなかったの、先生には何度も確認を取られた。本当に就職で宜いのか、大学だつてがんばれば行けるし、いまは専門学校も有るんだぞ。俺れは只嫌なだけだった。当り前に大学いつて、それが無理なやつは専門行って、時間かせぎをしている様にしかみえなかった。目標を持っているなら宜い。でも、やりたいことを捜すとかぬかしている奴、目標をもった伴をしているやつしかいない様に見えた、拗けた俺れの目には。俺れは高校のころからバイトをしていて、そのバイト場では年上の人許りだった。其人達の話しを聞いていると、あれに興味があつて専門いったんだけどさあ、卒業して就職したら合わなかつたから退めちやつたよ、やりたいこと探そうつつって勉強凄え頑張つて大学

行ったんだけど、結局見つかんかったよ、だったら、遣りたいことより自分に何ができるのかを知るために就職しようと思った。

駅前にある安い居酒屋であるここは、いつも賑わっていて寧ろ臯蠅い。大学生が多いのだろう、余り騒ぐので会話が聞えないことさえある。「そういやお前さあ」黒池が探る様な目で酒を飲む。「炬ちゃんとは最近どうなの」

俺は平静をたもつために烟草を喫った。「別れたよ」自分で思ったよりずっと、波風はたたなかつた。

「あつ別れたの」黒池は拍子ぬけた様で驚く。「なあんだ、じやあ取越苦労だったな」

「なにが」

「いやあ此前さあ、一カ月位前かな、炬ちゃんが男と電車乗ってるの見てさあ、夫が又すげえ親しそうな雰囲気だったからこれ危険いんじゃないかなあと思ってお前にいおうかまよってたんだよね。でも其んな敢えて報告すんのもあれじゃない？ 女々しいって言うか、そんなの当人同士で解決すりやあいい問題だし、浮気か何うかは瞭然に分んなかった訳だからさ、放つといた訳よ。でもこの前、一週間ぐらい前にも同じ男と——しかも可也の男前よ——電車のつて席座っていちやいちゃしてる？ とまでは行かないかもだけど手えつないで密着しながらお喋りしてたから是は不可んでしよう、と思つて急遽お前に連絡とつた訳なんだよね。いやあ同じ車両だしおれ露見んじゃないやねえかと思つて冷々してたんだけど、人も結構いたし夫れ以上にあれは夢中だったね、目がハートだったよ、そっか——別れてたのか——ご愁傷様ご愁傷様、己れ最近大学で彼女できてさあ、よかつたら彼女の友達紹介してやるよ忘れろって忘れろって、日はまた升るよ雨もいつかやんで」

黒池はよほど安心したのか喋々と言葉を吐いた。俺は周囲の噪音が遠くなったように感じたが、黒池の声が耳に分け入ってくるので相槌を打ち、ときには話しをうながした。俺が別れたのは二週間前だ。いや、それより、電車で席に座って？ あの、炬が、

熱を出しても頑固に立ちつづけた炬あかりがあの女が、席にすわったのしそうにおしやべり？ 黒池が冗談を言って笑うので俺れも笑った。

金を払って店をでた。黒池は肩の荷でも卸したつもりか上機嫌でかえっていった。黒池は、悪くない。思っても思っても憎くしみがわいた。俺れはたばこの箱を握りつぶして踏み躡ろうと思ったが、其そんなことして、何になると憎しみを足の裏にかくした。

嘘だったのか、ぜんぶ、神さまのことなんて信じてなかったのか、あんなに、頑固に、座席にすわらなかったのはただの陽姿ポーズ？ 思い出しても、左さ右みぎは思えなかった、ほんとうに苦しそうだった、だから俺おれも苦しかったんだ！ 仕事をしながらも、考えた、でもわからなくて答こたえは出なくて、うそだったと、それ丈だけは信じ度たなかった自分のためだろうと何だろうと。

いかりが復ぶり返かして、憎にくんで、苦しんで、全部、撲ぶつ壊こわしてやりたかった其そんなに、宜いい男なのか我をわすれる程、神様のこと、忘れれる程、お前のすべてじやなかったのか！ 分わらなかった、なにも彼かもわからなくなった、炬あかりのこと、しんじていた女のこと、俺おれは、ほんとに、しんじていたのだらうか。信じるなんて話こそんな簡単に使って宜いいのか、つかちゃいけないのか、俺おれがなにもかも甘かったのか。俺おれが駄目だったのか、否定して呉くれる人、いなかった、俺おれがただ誤茶ごちや々々考えてるだけだったから。

復ぶり返かした分、憎しみは付き纏まとった、仕事にも弊害がでて、こまかなミスをいくつもした、集中出来なかった。事務所の所長にも怒おこられた、「たるんでるんじゃないか」そうかもしれない、思った、弛た然るでる、だから、なにもみえなかった、嘘もほんとも分わらなかった、疑うたいもしなかった、だから、此こんな、欺だまされた気分になって、…俺おれが怒られたのをきづかってか宇川さんが飲のみに誘ってくれた。

「どうしたの、炬あかりちゃんのことでなにか有ったの」

心配そうな顔で宇川さんが訊く、

「いや、関係ないですよ、何か、ここん所、ぼうっとしちやあって」  
 「まだ、ひきずってるんじゃないの、ちゃんと逢って話しはしたの」

「いえ、してないです、……」俺は酒をのんだ。「会う気もないですし」

「夫れって、意地になってる丈なんじゃない、ただ自分から逢おうっていうのが憫然ないと思って、夫で逢わずにいる丈なんじゃないの」宇川さんは追及して来た。

俺は鬱遠しいな、思った、「左うですね、意地になってるのかもしれない」だから笑った「会うか会わないか、もういちどちゃんと考えてみます」すこし丈笑った。

宇川さんはため息を吐いた、「なら、いいんだけど、……」それからつづける、「ごめん、お節介いったね」

宇川さんの烟草の烟が騰ってすぐみえなくなった、居酒屋の照明はなにも彼も見えなくさせる、俺は月明りをしらない、照明の中で育だった、太陽と照明とねむる前のひと時の闇、夜、あるいても、町の照明は完全な暗夜を免さない、たばこの先端、何百度の熱、四周を照らすには心基ない、冬には手を温ためる、それさえ足りなくて、消すと携帯灰皿に仕舞い込む。

意地になつてると言うのは当たっている様に思えた、自分から逢おうというのが憫然ないと言うのも、或は俺の本音だろう。では、俺は、夫を克服すべきだろうか、左うして逢ってなにを言うべきだろうか、縁りを戻してくれ？ 最早、なにも、しんじることの出来ない女と、彼奴が、ごみをひろっていたら、なんて思うだろう、偽善者と、いつか俺れがいわれた様に俺れもあいつにいうだろうか、或は、やっぱり、神様のこと信じていたんだと思って感激するだろうか、極端なんだよ！ 彼奴は、神さまのこと、多分だけどしんじていてでもそのまえに一人の女だったっていうそれ丈のことだ、夫れ丈のことだけど、でも、熱をだしても自分がくるしくてもあ



つが守ったことを、あいつが簡単にやぶったことが、許せない、信じられない、……

帰り道たばこを吸ってあるいていた、まわりにはだれもいない、冬は寒くて手袋をしながら喫った。歩きたばこはだめだと言われるなぜ誰もいなくても駄目なのか？ 副流煙をすえるものなら吸ってみろ、前から自転車が遣って来る、煙草をすわずにひっ込めた、ポケットで携帯電話がふるえる、黒池だった。

「おう、今平気？」

「ああ」思いだして苦い思いをする「平気だよ」

「今度さあ、またのもうぜ、珍らしい奴から誘いが来ててさあ、お前もこいよ」

「珍しい奴」考える、中崎か、本庄だろうか、「だれ、中崎？」

「ふふふ、そいつは来てのお楽しみだな。日々なんだけどさあ、

○日だったらお前休みみっしょ？ どうよ」

「あーごめん、気イ乗らないからやめとくわ」

「なんだよーそんなこと言うなよー其奴がぜひにってことでお前御指名なんだよーな、な、たのむよ」

何度も断ったが黒池は執拗かった。ここまで執拗いのは珍らしいなど思ったのと、久しぶりの友達と逢えば多少は気分も変わるかもしれないと思ったのとで了承した。電話を切ったら又あのいやな気分を思い出し、失敗だったかなと後悔した。

「初めましてえ、美佳子です」

いわれるので挨拶する、「こつちだこつち」と黒池が嬉々として誘導する。黒池の新らしい彼女は頭の軽そうな子だった、だいたいこいつの彼女はいつもそうだが。駅で待ちあわせをした俺たちは移動を始めた。黒池は鼻の下を伸ばして彼女とおしゃべりする。俺れはひとりだ。くるんじゃなかったと思う。

店は小じやれた内装で、暗い照明の、雰囲気の良い店だった。全席個室が美点とかで四人用のテーブルに案内される。彼女の携帯電

話が鳴った、電話に出る為彼女が席を外す。

「で、お前の新しい彼女が、お前の言う珍らしい奴か？」

「まあ左うこわい顔するなって、其んな訳ないじゃん、ちゃんともう一人女の子招んでるから」

「女の子？」顔が強張る、「誰がそんなこと頼んだ？」

「いやいやいやいや、ほんと怖い顔するなって、いや、こう言うのはねえ、むりやりにでも女の子と逢って楽しく騒いだ方が傷も癒えるんだって」

「だれが傷なんか……」いつてる途中で彼女がもどって来た。俺は口を緘む。「もうすぐつくそうです」彼女が俺に笑いかける。已を得ずニコツとした。黒池はデレデレした。すきなんだろうな、思った。いま、何の疑いもなく好きなんだろう、……目を外らしてメニューを目繰ったり裏返したりした。

話なした所、黒池も彼女も是からくる子も大学のサークル仲間だということにはわかった。「お前は就活宜いのか」黒池にいうと「夫は言うなよー」と耳を塞いでつつ伏した。「面白ーい」と彼女がいうので苛つとした。世渡の旨そうな子だと思った。其様なのが、魅力になるだろうか、……吃度世渡がへたな子をみても俺は魅力と思わないだろう。

彼女と是から来る子は学年が一つ下なので就活はまだなのだと言う。「私も来年から就活かーと思うと」彼女が言った所で人が這入って来た。店員かと思ったら違った。

「深山さん？」

俺れが驚ろくと相手も驚いた。炬のともだちの深山さんだった。俺れと深山さん以上に黒池と其彼女が驚ろいていた。

「まさか知合いだったとはなー」

黒池が惜しいことをしたと言う調子でいう。「ねー」と彼女がすぐに同意する。知りあいとは言え、二度程しか逢ったことがないので親しいとは言えないが、知っていることは慥かだった。俺れは苦

々しい気もちでほんとうに来なけりや宜かったと思った。

「えっ、ていうか、炬は、……」

開口一番深山さんはいった。「別れたんだ」俺は二番目の台詞がこれだった。「あつ、そうなの……」深山さんは言って外套を脱いだ。酒をたのんで席に座る。

気不味かつたので極力話をした。黒池からきいて知っていたのにサークルでは何んなことやってるのなどと愚な質問をした。其上黒池が積極的に答えた。こいつは日頃からお喋舌りなのに酒が這入ると益しゃべる。彼女も話し好きのようだったが深山さんが余り喋舌らないので気になった。

二時間程がすぎ頃合になった。ここまでつきあえばもう義理はないだろう、抑も義理杯ないが。「あした仕事有るから」と言えば大抵そこまでは引き留められない。俺は時計を見た。「そろそろ……」いおうとすると深山さんがグラスを権と措いた。

「なんで炬と別れたの」

目が据っていた。酔いがまわっているのはたしかな様だったが、此んな酔い方をする人だっただろうか、「そーだそーだ、何んでだ」調子にのった黒池が乗ずる。

「いや、なんでって、言われても、……」俺が訊きたい、訳でもないが、なぜこんなところで公表しなければいけないだろう、と考えてはっとした。深山さんは俺れがふつたとしても考えているのではないだろうか、「別れて欲しいっていわれたんで……」早く帰りたいと思った。

「それではいはい言って別れて来た訳？」深山さんはなぜか俺れを責める。なぜ皆なすなおに応じたかを気にするのか、「あ、はい、まあ……」深山さんは炬から聞いていなかったのか、と漸く気付く。

なぜいわなかったんだろう、いや、敢えて、報告する様なことではないか、報告しづらかった？なぜ、自分が、好きな男をつくって出ていったから、やめよう、此様な所で腹をたててもしかたがな

い。こんな話をすれば場が暗くなるばかりだ、事実黒池の彼女は退避ひいている、「あの、ごめん、おれ……」強引ひに帰ろうとすると深山さんが店員をよんだ。酒を頼んでいる。

「何どういう理由か、教えてよ」一転して切実な顔で言う。深山さんからすれば、炬あかりから、うらぎられたような気もちだろうか、それが大袈裟あなら、信頼あされていなかったのかと言う様な。俺おれは完全に帰りそびれたなと思い、あげかけた尻おを椅子おに落おした。

「俺おれがしつてること、すくないよ。ただ、すきな人ができたから、別おれてほしいっていわれた丈だけ。その男と俺おれはあった事ことないしみたこともない、何どういう繋つがりでどういう経緯けいで好きになったのかも知らない、好きな人が出来た、って言われたけど、もう、夫それをいわれたときには付き合あってたんじゃなかった、其そんなこまかいこと今は疑うたがってる。でもなにも訊きかなかった。其そ時は好きで恋おもっててだから是これからつたえるから、俺おれとわかるんだろうって考かんえるでもなく漠然まと思おもってて、でも、夫それは間違まちがいかもしれなくて、つまりなにもわからないんだ、いまもわからない儘まま、此こんな感じだけど、意味いわかる？」と俺おれは深山みやまさんに確認かくんを取とった。拙たじ々たじしい説明せつめいで、まあ、分わからないだろうなと思おもった。俺おれは説明せつめいがへただ、うまくしゃべれない。でも、それを恥はじていたら、なにも伝わたらないから喋しゃべ舌べった。

深山みやまさんは考え込こんでいる様ようだった、「じゃあ、別おれてから一回も逢あってないの？」質問しつもんする。

「あつてないし、連絡れんらくも取とってない」

「私わたし、間あいだ、取とり持もって上げ様ようか？ そんな状態じょうじゃ、ふたりの為ためにならないでしょ、彼あの子このことだから、絶対ぜつたい、なにか事情じじょうがあったんだよ、只ただいわなかった丈だけで。しんじてあげてよ、信しんじてあげなきや、あの子こ可哀かわいそうだよ、……」深山みやまさんは酔よった目で俺おれを見みあげながら言いった。

かわいそう此この言葉ことばに赫か怒どした。「でもあいつはなにわなかった、じつと座まって、言い訳わけも、自分の事情じじょうを一方的いっぱくにわかってもら

うこともしないで、ただ凝と座ってた。覚悟が有ったんだ、彼奴にはいつだって覚悟があった、だからいい訳しなかつたんだ。ないでたけど、夫は、なんでか分らないけど、でも全部せおう覚悟で来たんだって、後から考えれば思っただけ、だから俺はあいつの事恨んでるけど、夫は、あいつの覚悟に適ってるって左ういうわけでもないけど、：：「言っただけ失敗したと思っただけ。黒池と、彼女が、完全にだまって居る。語がすぎたと後悔した。しかし深山さんは激して仕舞った。

「うらんだ儘なんて宜くないじゃん！ 会えば、せめて、自分の何所がだめだったのか、自分のどこが気に入らなかつたのか、わかるし、きつとちゃんと聞けば事情だっただけ教えて呉れるし、それが二人の為でしょ？ 是からの為になるでしょ？」勢よく捲し立てる。俺は落着く為に酒を飲んだ、其タイミングで店員が深山さんの酒をもって来た。誰もなにもいわない、店員が行くのをまって出来るかぎり平静に言った。

「俺は、駄目なところ、ばっかだよ。今でも、能く、彼所がだめだったんだとか、気がきかなかつたとか、思い返して後悔する。でも夫は他に教えてもらおう事じゃないんだ。炬が気にいらなかつたところ、たとえば俺が新しくだれかときあつたとして、その人が同じようにそこを気に入らないと思うかなんて、分らないじゃないか、俺は自分の駄目なところ、自分で気づいて、それを絶対に忘れちゃいけないんだと思う、自分で自分を批判しつづけなきゃいけないんだと思う、でももし俺が夫を人にあずけたら、もしかしたら其つぎのだれかが宜いと思っただけ、呉れる所を、俺は自分で悪いと思っただけに潰してしまうかも知れないじゃないか。それが、是からのためだとは、俺は思えない、少くとも俺は後悔する」言っただけ、深山さんが承服しかねる顔をしていたので、矢張り伝わらないかな、と思っただけ。伝えられる事なんて、ほんの一部で、誤解されても、我満するしかない。なにもかもを伝えようと欲張ってしまったばそのぶん相手にはとどかなくなつて行くんだ、深山さんが席をた

って外套とかばんを把った。「分んない、私には全然分んない」ひと言々つとび出していく。俺はため息を吐いて本当に、こなければ宜かったと心の底から思った。然し俺れ以上に後悔している男が隣にいた。

「おれは、おれは、お前の為めになればと思つて、……」黒池が目に涙を浮べて言った。「何うして己れはいつもこうなんだ、遣る事遣る事全部裏目に出て……」机をたたいて泣きくずれる。此奴はいい奴で、軽薄だけど、だから簡単に人の為めに行動出来る事を、ときどき思う。「ごめん、深山さんの御勘定、俺れが払うから」「そういうことじゃないんだよおでもありがとう」彼女は案外に平静で店員にあたらしい御肴みをたのんでいた。

それから帰える時間まで俺れと彼女で黒池を慰めた。黒池はさらにのんだので大部酔っていた。俺れが送つて行くよと言うと「だいいじよぶですよ」とこともなげに彼女がいう。「慣れてますから」いって笑つた。別れ際にも彼女は「元氣だしてください」と声を掛けて呉れた。迷惑をかけたのに、人を気づかう余裕の有るいい子だ。俺れの見る目なんてたいしたもんじやないな、思った。

それから暫らくは、誰とも飲まず、遊ばずすごした。深山さんと口論したお蔭か、気分は其所まで波立つこともなかった。黒池は最早わすれている頃だろう。休みの日にはパチンコに行つて、夜にはテレビをみて過ごした。

映画をみることも有つた。レンタルビデオ屋にいくと、炬と見た映画が並らんであつて、風波が起る。やっぱり詰らなかつたな、炬が涙を流がしてみた映画に、遠慮なく思えることがちよつとした発見で、同時に憂さを晴らした。

黒池達と飲んでから二週間もしたころ、電話帳に登録していない居住地から、メールがとどいた。

深山です。

黒池くんから勝手にアドレスを聞いてしまいました。突然メールしてごめんなさい。

話があるので、今度会いませんか？よかったら、休みの日教えてください。

絵文字がつかわれて居ないことが、俺はすこし怖いなと思った。平生ふだんからこういう人なのか、それとも感情の曲折があつて絵文字を使い度たくなかつたのか。俺は絵文字をつかつて思いつ切り可愛かわいメールを返かえそうかとも思ったが、思案のすえ廃やめた。

押し沼おしぬまです。

いいですよー、一番近い日だと、×日がおれは休みです。でも仕事帰りとかでよければいつでもいいといえはいいですけど、どうでしょうか？

なぜ敬語なのだろうと思つたが、相手も敬語だったので、いいかと思ひ送信した。それから何通かメールして、逢あうことに決きまつた。話はなして何だろう、……考えたが、わからなかつた。炬あかりに関することなのはまちがいないだろう。炬あかりにも、恐らく、会つたのだろう、炬あかりは何を言つただろう、何んな気持ちだつただろう、考えて、深山さんがとりもつてくれると言いうのを断然と拒否しておきながら、期待している、俺は低俗だな、いやだな、思つた、……自分から会おうと言いうのが憫然みづとないだけ、宇川さんにいわれたことを思ひ出した。左ひだり右みぎなのかな、左ひだりんくだからない理由だつたのかな、……しりたいと思おもう気持きもちが膨ふくらんで、強く否定することができなかつた。

深山さんと逢あう日まで、何日か、また擣とられることになつた。でも仕事に支障をだす程ではなかつた、夫それどころか賞ほめられることもあつた、でも俺おれは喜ぶことにも集中出来なかつた、話はなして

何だろう、炬は、何を、言っただろう、正直にいえばこんなことも思った。

俺れのメールアドレスを教えたのは黒池ではなく、実は、炬で、期日にまちあわせ場所にいくと、炬が待っていると言うような妄想。しかしそれから先は芳ばしくないもので、なにか、いつて遣ろうと思ったり、炬がなにか言い訳をして、俺れが難詰して炬をなかせたり、又、失恋れたあの日のことを思い出して、いかりに血をたぎらせ、やっぱり殴って遣りたい、せめて、頬をはるぐらいはしてやりたい、いつまでも瞋りにとらわれて、その一方で、炬と、もう一度、くらしで行くようなことを考え際限がなかった。俺れは女々しく、恋々して、見つともなかった。自分でも其ことが分っていた、然し時間が空けばそんな空想をした。

当日になった。結局仕事のあとであうことになり、俺れは一度家にもどり着替えてからむかった。向う途中どきどきした。此んなに緊張するのはいつぶりだろうと考え、炬と別れるより更にまえ、付き合っしてしばらくしてからぐらいかもしれないと思に至り、そう言えばいつ頃この緊張感をなくしてしまっただろう、夫が、つきあうって言うこと、いろんなことを、善くもわるくも習慣にしていくことが、同じ時間をすごすと言うことかもしれないと思っただ。

もちろん空想のなかには俺れが深山さんから無茶苦茶にせめられる、という筋道もあった。俺れは想像の中で反駁もしたし遣り込められもした。なにごともなく穏便に終れば宜いな、考え、でも炬がいることを考えた。

約束の場所につくと深山さんはまだの様だった。人のいないところで烟草を喫う。炬はルーズだっただと思っただ。深山さんはどうだろう、…約束の三分程前に深山さんはきた。

「今晚は」

俺れは「早かったね」と言い烟草を携帯灰皿にしまう。「早いって、押沼くんのほうが早いじゃん」いつてから、「あ、ごめん、このまえの御金払うよ」と鞆から財布をだした。



「いいって、おれ社会人だし」断ったが「其んなわけいかない、黒池から値段も聞いて来たからさ」とお札をさし出した。ここで問答しても損だなと思いうけ取った。一見したところ、機嫌はわるくなさそうだったので、ひとまず安心した。

「ご飯でもたべながらはなそうか」深山さんがいうので頷く。「あつちに、宜いお店有るんだ」ゆびをさして歩き始める。俺れがすこしうしろを歩いて、黙った儘移動した。なにか話そうかとも思ったが緊張の為か思い浮かばなかった。深山さんが少し後ろを振りむく。「仕事のあとで誘っちゃってごめんね」「ああ、いやいいよ、なれるから」まただまってあるいた。

人通りはそこそこ多かった。平日の夜だし、こんなものだろう。大体がみんなだまってあるいていた。はなしてはいても、聞えない丈かも知れない。皆な、深刻な話しや、笑らせる様な話を、持っている。出す機会が有る人もいれば、ない人もいるだろう、無理矢理に話して四辺から疎とまれる人もいれば、本人は話したくないのに根掘葉掘きかかっている人もいるかもしれない。俺れにはなにも知ることができない、此身のまわりの、ほんの糸かな人達のことさえ、俺れは満足にすることができない。

深山さんがとまった。店に着いたのかと思つて見ると、ただビルが有る丈で飲食店はない。深山さんを窺うと深山さんは一点をみていた。俺れも目を移すと人影がある、炬だ、

「炬……………」

立姿、服装、見なれた人物が、こちらをみていた。マフラーで顔がかくれているけど、わかる、何度も見た、すこし前迄、見れなくなるなんて想像もしなかった、俺れの恋人。

「此所で宜い」

なにか言う深山さんに告げた。「だまってごめん」だとか「冷静に話なそう」だとかいうので、うるさいなと思つた。頭は冴えていた、しかし心臓が止らなかつた、身体中が血に震える様な感覚

がおきた。

炬は変って居なかった、あたりまえだが、そのあたり前に納得出来なかった。俺れの、なにも彼もが変わってしまったのに、お前は其ままなのか。俺れの外貌だってなにも変っていなかったのに、理屈が分っても、わからなかった。

曠りが又燃えるのを感じた。然し、夫は、胸の悪くなる様な不純ないかりで、俺れが、怒っていることを、知らしめたいが為めにもえているのかもしれない。炬はたっていた、立って此方をみていた、深山さんが移動するので俺れも動いた。距離が詰まっても炬は只俺れのことを見た。

「久し振り」

俺れが言うので炬も答えた。深山さんは「やつぱり、ちゃんと話した方が宜いと思って」と紛雑言った。目に血が滾って沸騰しているようにも感じたが、まわりからどうみえたのかは分らない。俺れはいうべきこともなかったので立ち尽した。本当は、すごい速度で言いたいことが旋っているのかもしれない。でも俺れにはそのいいたいことがえらべなかった。

「一回、お店に入って、冷静に話ししよ」深山さんがあいだにはいった。

「ここで宜いよ、だいたい、話すことなんて有る？」俺れはだれに訊いたのかもわからなかった、だから誰もこたえなかった。

「そうかも知れないけど、でも、話しあい、本当に足りてる、お互い理解するまで、話なし合ったほうが、きつと」

炬はなにもしゃべらなかった、ただ泣きそうな顔をして俺れを見ていた。なけば夫れで済むのか、俺れは嚇鳴りたかったが嚇なれず目をそらした。俺れがいつか贈った時計は、もう、あそこには懸らないのだろう、隠れてみえない手首を見て思った。

まだなにか言う深山さんをさえぎった、「……お前は、何か俺れに、いうことあんのか」炬をみて言った。炬と呼びかけることは

ためらわれた、それがなぜだかわからなかった。

「ごめんね」

炬は一度目をふせて、上げると、言った。なきそうな顔で笑ったが今度は泣かなかった。俺は激した。

「ごめんね？ ごめんねって、詫まる位なら、するんじゃないよ、夫は何だ、自分が悪いことしたと思っ、夫で詫まってるのか、好きだったんないいやねえか、好きになったんないやねえか、えじゃねえか、詫まんよ、詫まられたら、俺は、……」自分が嫌になったのと、炬の目から涙が溢れたので、だまった。あたりは寂とした。道ゆく人で、こちらを見る人がいる。俺は羞恥心を感じ、俺は、なんて、小さい人間なんだろうと思っ。感情に耽がうことさえできない。感情を、打衝けることこえできない。好きな人に、好きだった人に。

暫らくだまっ、たので行こうとした。深山さんは炬の肩を抱いて保護者の様だった。俺が悪者か、左右かもしれない、思っ、踵を翻がえした。言うべきことはないか、考えたが、思い当らなかつた。

居酒屋の騒がしいのは、きらいじゃない。程度の問題も有るが。学生は騒しいからきらいだ、なんの責任もないからって、夫は人によるか、社会人でも皐蠅いのは皐蠅い。俺は宇川さんとのんでいた、俺が誘った。

「じゃあ、理解はし合えなかつた訳ね」宇川さんは笑いながらいう。

「まあ、そうですね、でも理解なんかしあえると思ひます？ 分らないことだらけですよ、知ろうとすればするほど、分なくなつて、俺には、むりですよ、ええ」

「まあ認め合えればいいと言ひ意見も有るけどね」

「そりや理論としてはそうでしょうよ、でも、まあ、……俺が無理な丈か」

俺おれはいつになく饒舌しやべって、気分が不安定なのを、かくした。逢あわなければよかったと、思った。当り前あただが深山みやまさんからは何の連絡つがもない。折角せつかく気を遣つかってくれたのにごめんと言おうとしたが、よけいなことをという意識が強くと言えなかった。

宇川うがわさんはだまってたばこをすった。喧騒けんそうがつよまった様な気がした。俺おれは喋舌しやべれば浮付うわついた言葉しか出て来ない気がして、口を緘つぐんだ。

頼たのんだ酒がきた。店員てんいんとは顔馴染かおなじみになっていて、宇川うがわさんが声を懸かける、「きょうも繁はんじよう昌しょうしてるね」「はい、面倒めんどうくさいっす」アルバイトが言うので笑った。「好いいい事だよ、忙しいのは」「いやー、此こんなに忙しいって知ってたら這入はいんなかったっすよ」はなしていると奥から呼ばれるので馳かけて行いった。正直しんじき過ぎるだろ、と笑っていると、宇川うがわさんが俺おれのことを見た。

「ねえ、ほんとに」みた儘ままつづける。「ごめんねなんて言うなって、思った？」

俺おれは視線しせんを外そらして、考えた、「最初は、心から、思いました。でも、あとから思い返すと、あの日のことでおぼえてるのが殆ほとんどあいつの言ったごめんねって語ことばだけで、その事考えてたら、あいつのいった事思い出したんです。誼げんか諱かして、仲ななおりました後あ、炬あかりは、わるくなかったんだから、詫あやまらなくても宜よかったのになっていたら、仮令たとえ、自分が悪くなくても、相手の気もちをわるくさせちゃったら、詫あやまらなくちゃって。だから、あの時、詫あやまったのなかとか考えて、ほんとうの所どは何うなのかわかんないですけど、今でも、其その、ごめんねって言ったことにたいしては、別にうらめしく思っおもってないです」考えながら答えた。

「彼氏かみぢをつくった事にたいしては？」宇川うがわさんが少し笑いながらきく。

「いや、もう、分わからないです。ごちゃごちゃして、憎にくくむ気もちとか、好きだった気もちとか、あつて、でも、一つの気もちじゃないです。おれ女々めめしいですかね」

「根深い性格ってことはたしかな様だね」

宇川さんがいうので根深いかーと復唱して考えた。その様子をみると「まああたしも根深いけどね」と言っただけで笑った。

あの日、帰ってからは、何度もあれを言うべきだったのかとか、べきだった、考えた。神様のこと、ほんとにしんじてたのかとか、もつと、優しい言葉をかければよかったのかとか、考えて、いえばよかった、後悔してからは、でも、思い付かなかったから、しかたないと思った。全部の事を伝えられるわけじゃない。俺は彼奴と逢って、でも言葉は選らばなくて、そしたら、それが凡てなんだと思う。胸のなかはずっと明澄しない。夫はただ、俺が陰険な性格だからかもしれない。

言い訳を重ねるのは廃そう。俺はいい人間になりたかった、為れなかった、是からも、為れないかは分らない。俺はあいつのことうれいと思った、でも、いまは、わからない。

お会計を済ませて外部にでた。帰る間際、「私、結婚するんだ」宇川さんがいう。俺は驚いた。驚ろいてへんな声を出した。「なにその声」宇川さんが腹をかかえて笑う。彼氏が居るのは知っていたが、まさか結婚するとは。「だからね、会社、退めると思う」言うのでそうかと思った。

俺は宇川さんのことも、ちゃんとしらなかつたのかも知れない。でもそれ位で丁度宜かったのかもしれない。何が正しいのかわからない、正しくないのかもわからない。分らない儘変わっていく、俺れ丈じゃなくて、皆な、それぞれになにかが有る。俺はいまは実感できないと思った、わからないと、変ることもあって、変らないことも有る、今は夫でいいと思った。

遅れて「お目出とうございます」と言った。宇川さんは「有難う」と言い、「あーいまの声録音しときゃよかった」と涙を拭いた。「やめて下さいよ恥しい」俺はいつて、「とは言ってもまだ暫くはいるから、またのみに来ようね」という宇川さんとわかれた。

帰り道があるいて帰った。明澄した訳ではないけど、何だか、す

こしなにかが分<sup>わか</sup>った気がする。気のせいかもしれない、気のせいじゃないかもしれない、前を歩くサラリーマンが喫<sup>す</sup>っていたたばこをすてた。火を消してひろうと、大きめの携帯灰皿に抛<sup>な</sup>げ入れた。